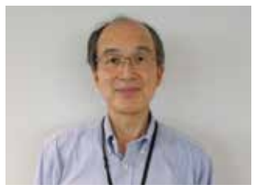
特集 しっとる？ 岐阜ヒストリー【特別編】 その七

豊臣秀吉像　岐阜市歴史博物館所蔵
豊臣秀長像　春岳院所蔵

『絵本太閤記』にみる豊臣兄弟の稲葉山城攻め



岐阜市ぎふ魅力づくり推進部
文化財保護課
特任研究員 **内堀 信雄**

プロフィール
昭和34年　栃木県宇都宮市に生まれる
昭和61年　名古屋大学大学院文学研究科（考古学）卒業
岐阜市教育委員会にて信長公居館跡発掘調査などを担当。
主な著書
『東海の名城を歩く　岐阜編』（共編、吉川弘文館、令和元年）
『戦国美濃の城と都市』（高志書院、令和3年）

2026年NHK大河ドラマ『豊臣兄弟！』。波瀾万丈な物語を毎週楽しみに視聴されている方も多いのではないでしょうか。

天下人・豊臣秀吉と、その一番の理解者として兄を支え続けた弟・秀長。岐阜県での二人の足跡といえば「墨俣一夜城」の印象が強いですが、実はここ岐阜市も、彼らの出世物語において欠かせない重要な舞台となっていました。

今回は、お馴染みの人気コーナー「しっとる？岐阜ヒストリー」の特別編として、岐阜市役所 文化財保護課の内堀さんに、ドラマの舞台裏ともいえる、岐阜に刻まれた兄弟の活躍を教えてもらいましょう。

はじめに

『絵本太閤記』は江戸時代後期（1797～1802年）に書かれた豊臣秀吉の伝記物語です。脚色や創作の部分が多く史実としては疑問符が付くとされますが、当時ベストセラーになりました。ここでは、織田信長が斎藤龍興の稲葉山城を攻めた際に豊臣兄弟が活躍したストーリーや登場人物、描かれる場所が今のどこにあたるかについてご説明します。

ストーリー

永禄7年9月（史実は永禄10年8月）、美濃三人衆が味方になると信長はただちに稲葉山城攻めを開始します。何重にも取り囲んで攻撃しますが、城主斎藤龍興は必死に守り、3日たっても落ちません。

秀吉は戦いの様子をみて搦手（からめて）方面の高山から攻めることを思いつき、8月13日（大手の）自分の攻め口を弟秀長に任せて、蜂須賀正勝（小六）ら7人だけで出発します。銘々腰には兵糧を付け、酒を入れた瓢箪を正勝の弟に背負わせています。途中「瑞立山」に登り、峰伝いに細道を通って稲葉山の後ろの「牧田」に出ます。ここから先は険しい岩山で、道もありませんが、身軽な秀吉が先に登り、やっとのことでひとつの平地に出ます。

ここで秀吉一行は酒を飲み、飯を食べてしばらく休んでいたところ、突然一丈（約3m）もある手負いの猪が飛び出します。危ないところに一人の猟師（堀尾茂助）が現われ、猪と格闘して仕留めます。

茂助の道案内で頂上に登り、敵城を見下ろすと搦手には一人の兵もいません。茂助を入れた8人は苦も無く城内へ侵入し、雑兵10人余りを切り殺し、具足（ぐそく）をはぎ取って斎藤方の兵士に変装します。また、柴薪（しばたきぎ）を積み置いた場所に火をかけます。そして、兵粮を運ぶふりをして城内を大手方面に移動します。

秀吉たちはついに大手の塀際に到着します。秀長らと打合せていたように、酒を入れていた瓢箪を竹の先に結んで塀際高くに差し出し、8人で水門の樋（ひ）を引き上げ、小六はそこを潜って味方を招き入れます。秀長は合図の瓢箪を確認するやいなや600余名で堀の中に飛び入り、小六が招く水門を目指します。斎藤方ではこれを見て鉄砲弓矢で防ごうとしますが、その時先ほど搦手で放った火が燃え上がり、大混乱となります。その隙に秀長らは城中へ潜り入り大門を（内側から）開けると、織田の大軍が城内に切り込んでいきます。

織田軍に二の丸まで攻め落とされ、城主龍興が本丸で防戦していると、信長は使者を出し「開城し退去するならば籠城している者の命を助ける。さもなくば殲滅する」と告げます。龍興は信長の通告を受け入れ、8月15日城を開き、退去します。こうして美濃一国はすべて信長のものとなります。

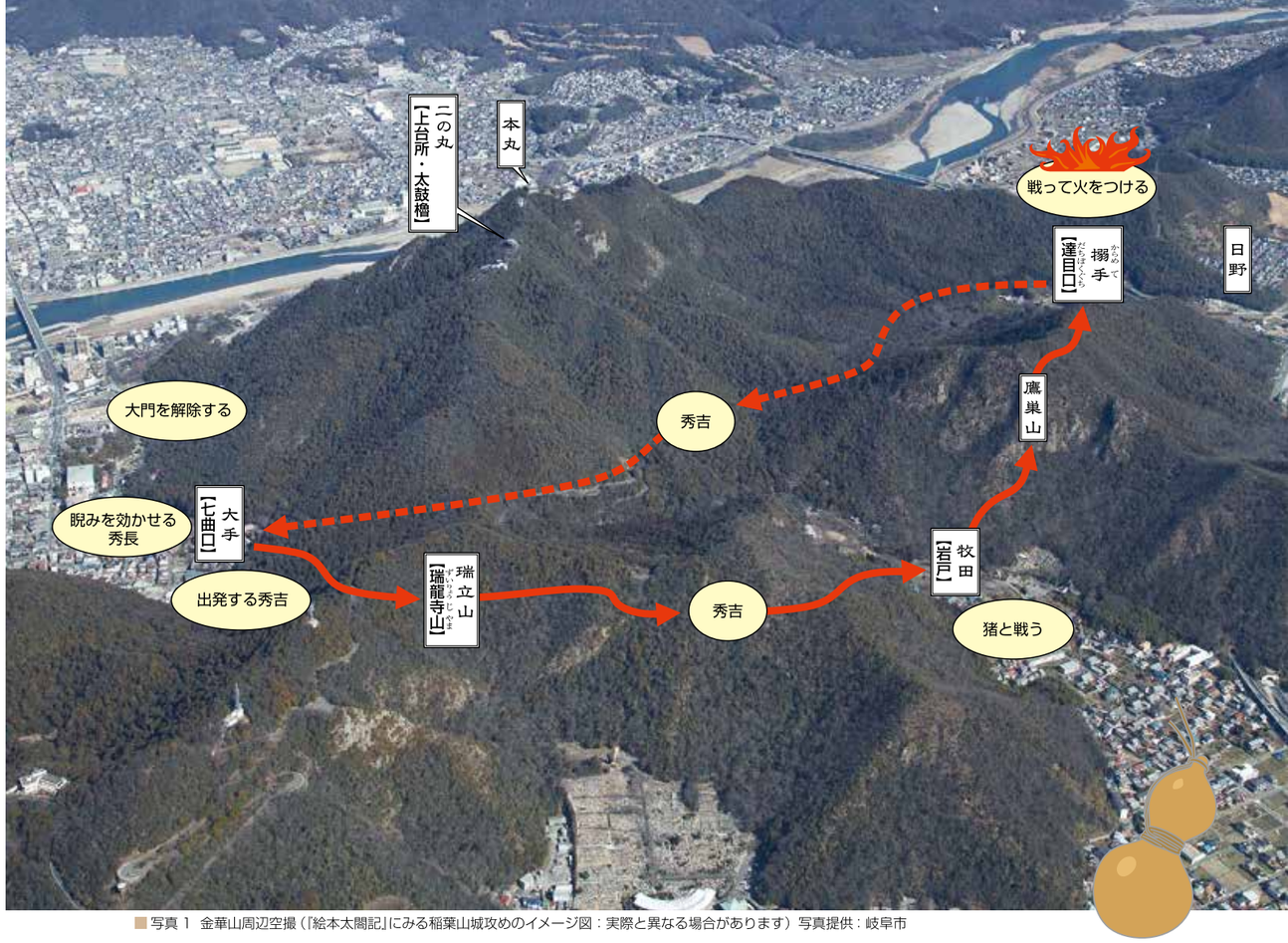
戦後、信長は家臣たちに美濃攻めの論功行賞を行います。秀吉の功績は特に大きいとして美濃国内に多数の領地を与え、「瓢箪（うまじるし）を馬印に用いよ」と命じます。秀吉の名声は高まり、これ以後瓢箪を馬印とし、戦功があるたびに小さい瓢（ふく）を一つずつ増やしたとのことです。

1 登場人物

主人公秀吉以外に稲葉山城攻めで活躍する人物は弟秀長、秀吉家臣の蜂須賀正勝（小六）、猟師の堀尾茂助の三人があげられます。秀長は兄の代わりに大手の攻め口を守り、瓢箪を合図に水門からの城内突入に成功し、大門を開けて織田軍を導き入れます。兄を補佐し、難しいミッションをこなす秀長らしい姿がよく描かれています。秀吉の馬印千成瓢箪の由来にかかわる興味深い部分ですが、残念なことに創作と評価されています。

蜂須賀正勝は実在の人物で、大手門付近の水門から秀長らを城内に招き入れる場面で見せ場があります。当時は信長の家臣で秀吉には与力（信長から秀吉に付属させられた武将）として仕えていたようです。その後秀吉に仕え、四国攻めなどで活躍、息子家政は秀吉から阿波一国を与えられ、徳島城を築城します。

堀尾茂助（吉晴）も実在の人物で、信長・秀吉に仕え晩年には松江城（島根県松江市）を築いています。松江といえば放映中のNHK朝ドラ「ばけばけ」の舞台です。稲葉山付近で猟師をしていたというのは荒唐無稽な話のように思え

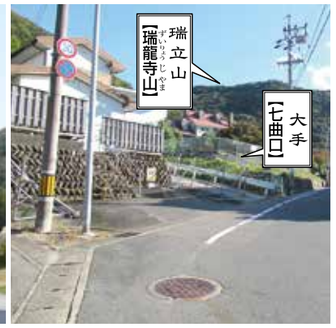


■写真１　金華山周辺空撮（「絵本太閤記」にみる稲葉山城攻めのイメージ図：実際と異なる場合があります）写真提供：岐阜市

ますが、『美濃国諸家系譜』には「父、氏晴ト共ニ弘治三年（１５５７）ヨリ、美濃国ニ移リ、厚見郡日野谷ニ蟄居ス。猟人ト成テ、浪人之業トス。永禄七年（１５６４）甲子九月、牧田之山中於木下秀吉仕。」とあり、日野に住んでいたことも書かれています。江戸時代には猟師茂助と秀吉の出会った場所が岐阜市日野付近との伝承があったのでしょう。なお、茂助の出身地は愛知県大口町で、大口町教育委員会が発行した『まんが大口町の歴史織豊期編』には稲葉山山中で猟師茂助が秀吉と出会う場面が描かれています。

2　描写場所の現地比定

慶長５年（１６００）８月23日の岐阜城の戦いの史料を参考に、『絵本太閤記』記載の地名等を現地に比定してみましょう（写真１）。なお、【　】内は近世に呼称された地名です。「本丸」は金華山山頂の復興天守を中心とした一帯です。「二の丸」は天守南の以前建物が建っていた【上台所】あるいは現在展望レストランが建つ【太鼓櫓】です。「大手」は城の正面で、七曲り登山道の入口の岐阜県歴史資料館及びその周辺【七曲口】です（写真２）。「搦手」は城の背後に位置し、慶長５年の合戦時は達目洞一帯【達目口】を指していました（写真３）。「瑞立山」は【瑞龍寺山】のことで、慶長５年の合戦時には付近を金華山ドライブウェーが通る金華山のすぐ南の山々を指していました。「牧田」という地名の場所は見当たりませんが、「瑞立山」から峰伝いに進んだとするなら岩戸の可能性があります。岩戸の東には鷹巣山がそびえていますので、これが『絵本太閤記』の「岩山」に相当しそうです（写真４）。鷹巣山からは眼前に金華山を望見でき、眼下には「搦手」達目洞を見下ろすことができます。



■写真２　七曲口（正面瑞龍寺山）

■写真３　達目洞（左奥金華山）

■写真４　岩戸付近（正面金華山、右鷹巣山）

3　同時代に近い史料との比較

太田牛一が書いた『信長公記』には、美濃三人衆が信長に味方したこと、それを知った信長がすぐに軍勢を出して「瑞龍寺山」へ懸け上がったこと、稲葉山城を「四方鹿垣結ひまはし」取り囲んだことなど、『絵本太閤記』と似た記述がみられます。また、ポルトガル人宣教師のルイス・フロイスが書いた『日本史』には、信長が稲葉山城攻めに際して夜間に軍勢の大半を「七、八里側面から迂回」させて「美濃国主の背後に配置」し、正面（大手）と背後（搦手）から斎藤軍を挟み撃ちにして城を落とした と書かれています。軍勢の規模は全く違いますが、搦手からも攻めた点で『絵本太閤記』と共通しています。

おわりに

『絵本太閤記』稲葉山城攻めの描写は、各場面が現地比定できそうなことや同時代に近い史料に類似記述があることから、何らかの信頼性のある情報に基づいているようです。ただし、豊臣兄弟や堀尾茂助・蜂須賀正勝の活躍、千成瓢箪の由来は同時代史料で裏付けることができず創作性が高そうです。『絵本太閤記』の作者は、「豊臣兄弟と千成瓢箪」の物語にふさわしい舞台として岐阜城を選んだのでしょう。史実とともにこうした物語も岐阜市の魅力のひとつとして役立てていきたいと思います。

＊《参考文献》
●有朋堂書店１９２６『絵本太閤記上』
●桑田忠親校注・新人物往来社発行１９６５『改訂信長公記』
●松田毅一・川崎桃太訳・中央公論社発行１９７８『フロイス日本史４』
●大口町教育委員会２００４『まんが大口町の歴史織豊期編』
●田中豊訳２００７『美濃国諸家系譜（堀尾）』
●柴裕之監修・かみゆ歴史編集部編著２０２５『太閤記解剖図鑑』